

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32693

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11796

研究課題名(和文) 民間単科精神科病院の看護師の継続学習を専門職連携で支える学習支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a learning-support program ; Collaborative work of professionals assists continual learning of nursing staff at private psychiatric hospitals

研究代表者

市川 佳子(松本佳子)(ICHIKAWA, Keiko)

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：30277892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、様々な立場の精神科看護師たちへのインタビュー調査により、次の成果を得た。看護部長らは、現任教育をケアの質を保証するための基盤として捉え、事務部門との連携の必要性を感じながら試行錯誤しており、次世代への継承方法を模索していた。一方、病棟看護師が抱く学習の動機は、ケアの場における人間関係の葛藤と密接に関連していた。教育に携わる看護師は、看護師同士が人間関係の葛藤と向き合いながら、互いに学び合うことを期待していた。

精神科での経験が長い看護師の経験値を共有する重要性が示唆され、看護師同士の感情を共有する場から生じる対話を学習の基盤とするプログラムの必要性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民間精神科病院の看護師の継続学習においては、これまでの集団トップダウン型の学習提供には限界があり、ボトムアップ型の対話を基盤とした学習支援プログラムが必要であることが明らかとなった。誰もがメンタルヘルスの問題を抱える可能性がある現代に生きる我々にとって、そのケアを担う精神科看護師を支えるための支援は喫緊の課題である。本研究における実践的示唆は、看護学領域はもちろんのこと、保健・医療・福祉のあらゆる場へ応用できる可能性があり、専門職連携に関する基礎的知見を得る研究としても意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study produced the following results by means of interviews with psychiatric nurses of various positions. Nursing directors considered continuing education for their nurses as the basis for ensuring the quality of care. While recognizing the need for working together with their administration department they have been through trial and error and were trying to figure out how to pass on the skills and knowledge to the next generation. On their part, the ward nurses' motivation to learn was closely related to their struggle in human relations during their care work. Nurses who were providing education expected that the nurses would squarely face their troubles in human relations and learn with each other.

The study suggested the importance of sharing the experience and knowledge of experienced nurses, revealing the need for a program that would enable learning to be built upon the dialogue generated in the space for sharing nurses' feelings.

研究分野：精神保健看護学

キーワード：民間精神科病院 現任教育 精神科看護師

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本は立ち遅れてきた精神医療に伴い、看護学領域でも精神看護学が独立した科目として柱立てされたのは 1996 年のことである。この動向は医療現場の現状とも深くかかわっており、長い間、民間の単科精神科病院の看護スタッフのほとんどが無資格者や准看護師で担われていたという事情がある。さらに制度上でも医療法では、精神病床(総合病院精神科病床は除く)は、一般病床よりもスタッフの人員配置は少なくともよいという精神科特例がいまだ改定されていない現状である。しかし日本では精神科病床数の約 90%以上を民間の単科精神科病院が担う状況が現在まで続いている。単科精神科病院で働く看護師の継続学習のあり方は、こういった精神医療事情の影響を最も大きく受けてきたと考えられ、改善の急がれる課題のひとつである。

さらに民間の単科精神科病院に勤務する看護師の社会背景、教育背景は多様であり、中途採用者が多く、年齢も高い傾向にあり、反対に新卒者の就職率が低く、転職経験や離職率が一般病院よりも高い傾向にある(本吉ら,2005)。その大きな要因の一つとして、患者の自殺や暴力に遭遇するなど、看護師はケアの代償として、二次的 PTSD を引き起こす可能性が指摘されている(B.H.Stam,1999)。それでもこれまで一部の現場では、手探りで懸命に看護を実践してきたが、看護師の継続学習という視点からは程遠かったと言える。

(2) 近年では、看護系大学及び大学院の急激な増加に伴い、これまで准看護師が圧倒的多数を占めていた民間の単科精神科病院にも、数は少ないものの学士号、修士号を持つ看護師が就職するようになった。こういった経過もあり、個々の看護師のキャリアの考え方、看護観もまちまちであるために、現場のニーズにあわせた現任教育プログラムを作成するのは非常に難しいという指摘もある(山根ら,2007)。しかし中には、精神科看護においても、一般科看護のクリニカルラダーシステムを導入している精神科病院もある。ところがそれも、現場で働く看護師たちの要求と一致しておらず、その成果が現場に還元されているとは必ずしも言えないことが指摘されている(平沢ら,2009;渡辺ら,2011)。

そこで本研究では、民間精神科病院をフィールドとし、精神科看護師相互の効果的な専門職連携の在りかたについて検討しつつ、現場で働く看護師のための学習支援のサポートシステムの検討に着手することにした。

2. 研究の目的

(1) まず、民間精神科病院の看護部長の現任教育に関する取り組みの実態を明らかにする。

(2) 次に、民間精神科病院に勤務する病棟看護師の学習の動機と、教育担当の看護師の現任教育への期待 現任教育によって病棟看護師にどのような変化を期待するのか を明らかにする。

(3) 最終的に、精神科看護師の現場に密着した学習支援と継続学習のためのサポートシステムを検討する。

3. 研究の方法

(1) まず、研究の目的(1)の基礎データを得るために、看護部長からの詳細な聞き取り調査を行った。具体的には以下の通りである。

・研究対象者

日本において、関東地域の都市部の民間精神科病院で、研究協力の得られた 5 施設の看護部長である。

・データ収集方法

研究対象となる施設長、及び研究対象者である看護部長に承諾を得て実施した。研究に同意した対象者に対して、研究対象者の希望する日時に、研究協力者の所属する施設にて、プライバシーが確保できる場所において、研究者 2 人が聞き取りを行う、半構造的面接を行った。面接においては、現任教育の取り組みの実態と、看護部長の立場からの具体的な困りごとや看護部長の感じている課題等について半構成的面接を行い、許可を得て内容を録音した。

・データ分析方法

インタビューデータから逐語録を作成し、データを熟読した。その後、各看護部長が取り組む現任教育の実態について整理し、再構成を行った。そして、再構成した内容をもとに、それらの特質に注目し、それぞれのテーマを抽出した。その後、それぞれの民間精神科病院に共通するテーマに着目し、分析を行った。

・分析結果の厳密性

本研究は、データ収集から分析の全過程を通し、研究者 2 人が関わり、可能な限り、研究対象者が語った内容について、的確に捉えられているか、相互に確認しながら、解釈に偏りのないよう、分析の厳密性の確保に努めた。

・倫理的配慮

研究対象者が勤務する施設の病院長と研究対象者である看護部長に、文書及び口頭で研究について説明し、研究の承諾を得た。研究対象者に調査の目的、方法、承諾の任意性、プライバシーの保護、匿名性の保持、不利益はないこと、結果は学会などで公表するが、個人が特定されないことなどを、文書及び口頭で説明した。同意書の署名をもって研究の同意を確認後、面接を行った。本研究は、研究者の所属する埼玉県立大学の倫理委員会の承認(承認番号:26019 号)を得た。

(2)次に、研究の目的(2)のために、民間精神科病院3施設に勤務する立場の異なる看護師(病棟看護師及び教育担当の看護師)へのインタビュー調査を行った。具体的には以下の通りである。

・研究対象者

都市部の民間精神科病院で、研究協力の得られた3施設の看護師(病棟看護師 計12名、教育担当の看護師 計5名)である。看護師については、看護部長の推薦があった者とした。看護部長には精神科看護の経験年数が偏らないよう依頼した。

・データ収集方法

研究対象となる3施設の施設長および看護部長に承諾を得て、研究の主旨に同意した対象者にグループインタビューを実施した。研究対象者の希望する日時に、プライバシーが確保できる場所を確保し、3施設毎に研究者2人が病棟看護師、教育担当の看護師らへのグループインタビューを実施し、許可を得て内容を録音した。データ収集の具体的な手順は以下の通りである。

まず、3施設に勤務する病棟看護師に対し、学習への動機と学習したい内容について、施設ごとに各1回のグループインタビューを実施した(計3回)。

次に、同じ3施設に勤務する教育担当の看護師に対し、現任教育を行うことで、病棟看護師に対して、どのような変化を期待するのかをテーマに、施設ごとに各1回のグループインタビューを実施した(計3回)。

・データ分析方法

インタビューデータから逐語録を作成し、データを熟読した。その後、病棟看護師の学習の動機と、教育担当の看護師の現任教育への期待について焦点を当てながら、類似性のある内容を抽出し、分類した。さらにその共通性から、看護師の学習の動機と教育担当の看護師の現任教育への期待について、それらの特質に注目し、それぞれのテーマを抽出した。

・分析結果の厳密性

本研究は、データ収集から分析の全過程を通し、研究者2人が関わり、研究対象者が語った内容について、的確に捉えられているか相互に確認しながら、解釈に偏りのないよう、分析の厳密性の確保に努めた。

・倫理的配慮

研究対象者が勤務する施設の病院長と研究対象者である看護部長に、文書及び口頭で研究について説明し研究の承諾を得た。研究対象者に調査の目的、方法、承諾の任意性、プライバシーの保護、匿名性の保持、不利益はないこと、結果は学会などで公表するが個人が特定されないことなどを、文書及び口頭で説明した。同意書の署名をもって研究の同意を確認後、面接を行った。本研究は、埼玉県立大学の倫理委員会の承認(承認番号:28015号)を得た。

4. 研究成果

(1)看護部長からの詳細な聞き取り調査の研究成果は以下のとおりである。

研究対象者は、同意の得られた5名(女性3名、男性2名)である。個室で80分程度の半構造的面接を実施した。

その結果、看護部長たちは現任教育を日常的看護ケアの質を保证するための基盤として捉え、与えられた環境に応じて、創意工夫を凝らしていた。このような教育活動を支える大きな要因として、他部門との連携や理解の重要性が語られた。とりわけ、事務局と連携を組みつつ、教育体制を整えることは、看護部長の役割のひとつと捉えていた。

今回調査対象となった5か所の施設では、現任教育に関する限られた人材と費用の中で、院内の学習支援だけでなく院外の研修会や遠隔教育も取り入れるなど、様々な取り組みを試みていた。このような背景には、新人の入職が少なく中途採用者が多いため、一斉教育プログラムを企画しにくいこと、教育背景や経験年数が様々であるため、各々の看護師の学習動機にそえないといった現実があった。このように看護部長たちは、現場で働く看護師たちとの仕事や学習に対する意識や意欲のギャップを感じつつ、学習環境を調整する難しさに直面しながら、学習環境を提供するため試行錯誤していることが明らかになった。

看護部長たちの手探りで現場改善に取り組むその基盤には、スタッフたちとの信頼感に基づいた関係性が存在した。しかしその一方で、看護部長たちの中には、師長との関係性の難しさという現実に直面している者もいた。

また多くの看護部長は、次世代への期待と継承方法を模索しつつ、現任教育をいかにすれば発展し継続できるか、さらに次世代につなげるにはどうあるべきかについて心を砕いていた。

以上のインタビュー結果から、以下の3点が導かれた。

・現任教育の多様性と限界 ボトムアップ型教育システムの必要性

民間精神科病院の看護部長の現任教育への取り組みの特徴は、人的資源や組織的環境においても実に多様であった。しかしその中で、各施設に共通していたことは、管理者である看護部長とそのブレン、あるいは教育担当が、いわばトップダウン型の形で、教育課題を企画・発案し、現場の看護師たちに学習の機会を提供する形態であった。しかしこういった従来からのトップダウン型の学習方法は、専門資格や年齢層、社会背景の多様なスタッフの集まる民間精神科病院の特徴からみて、定着させるのは難しいと考えられる。多様な看護経験と教育背景をもつ看護師の学習動機に応じられないからである。

また、従来からのトップダウンの学習環境は、患者との関わりや関係構築といった対人関係構

築のプロセス自体が、患者と看護師の互いの回復や成長、そして看護につながるといった特徴をもつ (Peplau, 1952/1973) 精神科看護を日々実践する看護師自身の、学びの要求と学習への動機には、そぐわないとも考えられる。こういったことから、病棟で働く看護師自身が何を学習したいと望んでいるか、その生の声を聞き取り、個々の学習動機をくみ上げる作業がまず必要であろう。

・事務部門と看護部との連携の重要性と難しさ

看護部長たちは専門職との連携、特に現任教育の経済的基盤を確保するために事務組織と連携する努力をしていたが、同時にその難しさに困難感を抱いていた。経済的な問題が、学習支援のあり方と直結するだけに、看護部長の考える現任教育を実現するためには、医療の専門家ではない事務組織にその必要性を理解してもらうという交渉のスキルが要求される。特に民間精神科病院においては、事務組織や看護部門の管理構成によっては、そのような交渉自体が難しい場合も考えられる。看護部長の管理への力量が大きく問われるところであろう。

・看護専門職者の現任教育への活用

看護部長の中には、CNS、認定看護師の資格をもつ看護師らを現任教育に活用しているケースもあった。こういった専門職と部長や師長といった管理職が、いかに連携できるかが、現任教育の質向上の鍵を握るのではないだろうか。心情的にも支え合うことができ、看護部長の重責を理解し、協働できる相互支援のための存在が、現任教育の質向上のためにも今後、求められる。

(2) 民間精神科病院 3 施設に勤務する立場の異なる看護師 (病棟看護師及び教育担当の看護師) へのインタビュー調査からの研究成果は以下のとおりである。

研究対象者は、3 施設において同意の得られた病棟看護師計 12 名、教育担当の看護師計 5 名である。それぞれ 1 回のグループインタビュー時間は 1 時間 30 分程度で、計 6 回行った。

【民間精神科病院に勤務する病棟看護師の学習の動機】

病棟看護師たちの抱く学習の動機は、一見潜在化しているように見えたが、インタビューの相互作用の中でいずれの施設でも自発的に語られた。看護実践の経験年数によって語りの内容は実に多様であったが、その語りから看護師の感じている「人間関係の難しさ」と「専門的知識の不足についての自覚」が学習の動機につながっていると考えられた。詳細を以下に示していく。

<人間関係の難しさ>

患者との「かかわり」

病棟看護師たちは、患者との日々のかかわりの中で、患者とかかわる難しさを感じており、戸惑った経験について語った。また、一見目立たないように見える患者にかかわることの大切さや自分自身のかかわりの課題についても語られた。こういった経験をこれからのケアにつなげたいという意識が、学習の動機となっていた。そして、精神科看護の経験年数が約 1 年から約 2 年の複数の病棟看護師から、患者に陰性感情を抱いた際の自身の感情の取り扱い方について語られた。患者とのかかわりから看護師自身に沸き起こった怒りなどのコントロールしがたい感情について、複数の病棟看護師が、その感情処理の難しさを語り、何らかの対処の方策と同時に、その理論的根拠についての学習を求めている。

家族への対応

家族への対応の難しさや、家族から怒りの感情をぶつけられた時の戸惑いも語られ、家族への適切な対応について学びたいという切なる思いが語られた。また、入院が長期にわたった患者家族に対する対応の難しさや長年傷つきを抱えた家族に対する言葉かけに伴う困難感が語られた。

スタッフ同士の関係性

精神科看護の経験年数 7 年以上の複数の病棟看護師が、他職種連携の難しさを具体的に語った。特に、医師や精神保健福祉士との連携の難しさが語られ、連携に関する学習のニーズがうかがえた。さらに、上述したような陰性感情を抱きつつもケアにあたるために、同僚である看護師同士の感情的共有の必要性も、精神科経験年数約 7 年以上の複数の看護師から語られた。そして同時に、同じ病棟で働く看護師同士でも、ケアへの温度差から生じる葛藤により、看護師同士の感情的な共有が困難である現状についても語られた。

<専門的知識の不足についての自覚>

地域移行に伴う社会制度に関すること

地域移行支援への使命感を感じながら、望ましい支援が提供できず、もっと社会制度について勉強したいという率直な思いが、複数の病棟看護師から話題にあがった。

身体的ケアの知識や精神疾患に関すること

自身の身体的ケアの知識不足に対して、悔いの思いを持つ看護師もあり、具体的な看護技術の必要性や、薬物療法に関する知識の必要性が語られた。

【教育に携わる看護師の現任教育への期待】

施設により、教育担当の看護師の資格の有無やポジションは異なっていたが、教育担当の看護師が現任教育に期待することは、以下の 3 点に集約された。

- ・患者へ関心をもち患者を理解する視点を持つこと
- ・看護師の背景の多様性を互いに生かすこと 経験の長い看護師の経験知の継承
- ・病棟の雰囲気の変容

以上のインタビュー結果から、以下の 2 点が導かれた。

- ・看護師の学習の動機とケアの場での人間関係の葛藤

病棟看護師へのインタビュー調査では、実に多様な学習の動機に関する語りが聞かれた。その背景には、日々のケアにあたって病棟看護師らが抱える人間関係の葛藤が横たわっていた。つまり、病棟看護師らが抱えているケアの場での人間関係の葛藤と学習の動機は密接に関連していたのである。このように、精神科看護師の学習の動機とケアの場での人間関係の葛藤は密接に繋がっているのである。

・現任教育への期待とその背景

教育担当の看護師らは、現任教育によって、看護師の背景の多様性が互いに活かされ、病棟の雰囲気を変容することを期待しているといえよう。つまり、教育担当の看護師たちは、現任教育によって、病棟内の看護師同士が人間関係の葛藤と向き合いながら、互いに学びあうことを期待していると考えられる。看護師たちはその立場に関わらず、病棟内の人間関係やチームアプローチに課題や難しさを感じ、対人関係にまつわる学習を切に望んでいるといえよう。

多田羅（2017）は、精神科での経験年数 25 年以上の病院に勤務している看護師に対し、精神医療の変化における体験と思いについて聞き取り調査を行っている。その中で、ベテラン看護師らは、若い看護師に自身の経験した看護を伝えつなげたいと課題と希望を持っていたと結論づけている。蓄積された貴重な看護経験を意味づけし、若い世代の看護師といかに分かち合っているか、そのための動機をいかに引き出していか、さらにそういった場を通し、看護師同士が世代を超えて手を組んで現状に向き合っているかが現任教育の課題といえるであろう。

（3）看護への示唆

前述したように、精神科病院における現任教育は、管理者である看護部長とそのブレーンが、いわばトップダウン型の形で、現場の看護師たちに学習の機会を提供する形態であった。しかし同じ民間精神科病院であっても、教育担当の看護師の教育背景、立場などは、施設毎に実に多様であるのが現実である。このような多様な現状を鑑みると、まさに今、従来のトップダウン型の方法から発想を転換することが求められているといえよう。

具体的には、同じ学習課題への関心を持った看護師らがまずは少人数で集まり、学びの場を共にすることを繰り返すといった方法も一案であろう。医療教育分野においては、PBL（Problem-Based Learning）というカリキュラム 少人数グループに対し、チューターと呼ばれる教員が付いて行われる が注目され、看護学教育においても導入されている。民間精神科病院の看護師の現任教育においても、精神科看護を専門とする教員と、同じ学習課題への関心を持った看護師が少人数で共に学びあう、という実践を試みる価値があるのではないだろうか。つまり、看護師同士の直接のかかわり 感情を共有する場から生じる対話 を学習の基盤とするのである。経験の長い看護師の経験知を共有するためにも、こういった試みが現場で根付くことが、必要ではないだろうか。なぜならばこのような試みは、患者とのかかわりや関係構築といったプロセス自体が患者と看護師の互いの回復や成長、そして看護につながるといった特徴をもつ精神科看護の質の向上に結び付くのではないかと考えられるからである。

（4）以上の研究成果から導き出された結論

・民間精神科病院に勤務する病棟看護師の学習の動機は、ケアの場での人間関係に対する葛藤と密接に関連していた。

・教育担当の看護師たちは、現任教育によって、看護師同士が人間関係の葛藤と向き合いながら、互いに学びあうことを期待していた。

・精神科での経験の長い看護師の経験知を共有する重要性が示唆され、看護師同士の感情を共有する場から生じる対話を学習の基盤とするプログラムの必要性が明らかとなった。

<引用文献>

平沢 めぐみ、高野 和恵、布施田 史恵、伊藤 文、渡辺 恵子、精神科看護技術の習得時期に対する調査 精神科クリニカルラダーをもとに、日本精神科看護学会誌、52 巻 1 号、2009、406-407
本吉 恵子、新野 由子、精神医療の現状に即した、精神科看護師の臨床看護実践能力の向上を目指して 日本看護学会論文集：看護管理、36 巻、2006、166-168

Peplau, H. E., 稲田 八重子、小林 富美栄、武山 満智子、都留 伸子、外間 邦江訳、人間関係の看護論（第 1 版）、医学書院、1952/1973

Stam, B. H., 小西 聖、金田 ユリ子訳、外傷性ストレス 臨床家、研究者、教育者のためのセルフケアの問題、誠信書房、1999/2003、

多田羅 光美、精神医療の変化における精神科ベテラン看護師の体験 精神保健福祉法制定頃の病院の状況と看護師の思い、日本精神保健看護学会第 27 回学術集会・総会プログラム抄録集、2017、171

渡辺 純一、北村 周美、瀬野 佳代、クリニカルラダー 5 年目の評価、日本精神科看護学会誌、54 巻、2011、327-325

山根 美智子、山本 勝則、精神科看護継続教育に関する研究の動向、獨協医科大学看護学部紀要、1 巻、2007、1-12

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松本佳子 出口禎子	4. 巻 26
2. 論文標題 民間単科精神科病院の看護部長が取り組む現任教育の実態	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会誌	6. 最初と最後の頁 40-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20719	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松本佳子 出口禎子	4. 巻 20
2. 論文標題 民間精神科病院に勤務する看護師の学習の動機と現認教育への期待 病棟看護師と教員担当看護師のインタビュー調査から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本赤十字看護学会誌	6. 最初と最後の頁 122-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松本佳子 出口禎子
2. 発表標題 教育担当看護師がとらえる私立精神科病院の現任教育の課題
3. 学会等名 日本看護研究学会 第21回東海地方会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松本佳子 出口禎子
2. 発表標題 私立精神科病院の看護師の学習二ードと学習継続の困難さ
3. 学会等名 日本看護研究学会 第29回近畿・北陸地方会学術集会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	出口 禎子 (DEGUCHI Sachiko) (00269507)	北里大学・看護学部・教授 (32607)	